編集後記

禅寺の玄関に、よく「看脚下」とか「照顧脚下」と記した掲示をみる。仏道は足もとにあるという警句である。日一日と深刻さの度合いを増している宗門の現況であるが、こういう時にこそ確めたいのは、自分の足もとである。自分は一体どこに立っているのか、どこへ歩まんとしているのか、と。

伝統ある大谷大学の真宗学科に因縁を結んだ殆んどの人が、その創立の母体ともいうべき東本願寺の苦境を悲しまずにはいられないだろう。そして、その苦境を坐視し、紙魚のように書物の間を這いずり回っているばかりの自分の姿に、苛だちの感情を押えられぬのではあるまいか。なにか自分にできることはないのか、と。だが再考すれば、今もっとも私たちに必要なことは、外を見て苛だつ心を、逆に静かに内に転ずることではないだろうか。浮足だった気持を、もっとしっかり大地の上に立たしめねばならない。

実は、本誌が今回このような特集を組んだのは、自分たちの立脚地を静かに見詰め直すべきではないか——という空気のわだかまりを内外に感じたからである。今号が生まれた背景には、このような願いがある。いま、お寄せ頂いた原稿を拝見し、あるいは座談会での諸先生の発言や安田理深先生のお話を筆録してみて、つくづく考えさせられることは、真宗学徒の使命ということである。使命感を失った真宗学は、死せる真宗学であろう。

「開かれた真宗学」とは、ここ何十年来の標語であるが、真宗学が開かれる道は、はだかの現実に触れる以外にはない。宗門の行手は厳しいが、言えることは、現実がある限り、真宗学の使命は無限に大きいということである。親鸞において、越後配流の意味が大きかったのは、この地で群萌のはだかの現実に触れたからである。親鸞の使命感は、この逆境のなかで強固になったに違いない。

編集部のこの企画のために、先生方には随分と無理な注文をお願いし、そのため色々とご迷惑をおかけしてしまった。とりわけ座談会では、問題設定の途方もなさと進行役の未熟さゆえに、出席された先生方のお気持を充分に汲み出せないまま会を閉じなければならなかった。しかしともかくここに本誌34号を世に送り出す運びになった。諸先生の暖いご協力に心からお礼申し上げたい。（安富）

昭和54年7月1日　印刷
昭和54年7月20日　発行

親鸞教学　第34号　〒650

京都市北区小山上総町22
編集　大谷大学真宗学会
発行　親鸞教学編集部
発行人　寺川俊昭
大谷大学真宗学研究室　振替　京都8225番

京都市中京区寺町通三条上ル
発売　文栄堂書店
振替京都2948番

京都市下京区七条御所ノ内中町50
印刷　中村印刷株式会社
電話(313)—0468番